

理論と実践の橋渡し③～「“独立変数”の選び方」～

今回は独立変数と従属変数について考えていきます。

端的に言えば、独立変数とは「説明する側の変数」です。対して、従属変数とは「説明される側の変数」となります。

ところで、ときに原因となるのが独立変数で結果となるのが従属変数だと理解されている場合があります。しかし、厳密には正しくありません。説明-被説明関係と、因果関係は少し違うからです。因果を証明するためには、「原因となる変数が時間的に先行していること」など条件がいくつか必要となります。説明-被説明関係では、それらの条件は必ずしも必要ではありません。このあたりは色々調べてみていただけたらと思います。

本題に戻ります。独立変数は説明する側ですので、独立変数が変わると従属変数が変わるという性質を持ちます。したがって、ねらい（たとえば自己肯定感の向上を目的とした学習であれば自己肯定感）となるのが従属変数であり、そのねらっている変化を起こすために、指導／支援する側、つまり操作（介入）する変数が従属変数となります（図1）

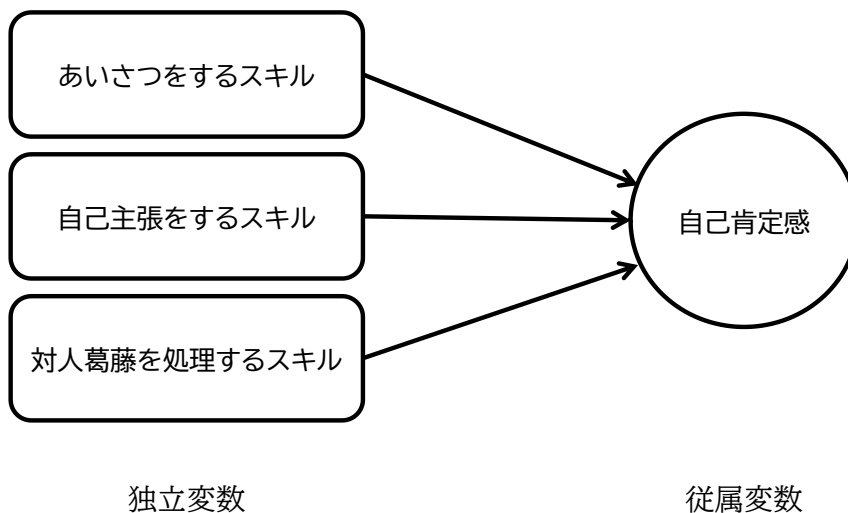


図1 独立変数と従属変数の例

図1は、「自己肯定感を高めるために、子どもたちの対人関係を良好にすることが有効であるという質問紙調査の分析結果に基づいて、社会的スキルを向上させるための実践（SST：ソーシャルスキルズトレーニング）を行った。」という想定で、独立変数と従属変数を図に表したものです。

このように、ひとつめの独立変数の選び方のポイントは「理論的裏づけ」のある変数を選ぶということです。なぜそれが独立変数でありうるのかということ、つまりそれが従属変数の変動を促す要因であることを論理的に説明できるということが、独立変数を選ぶ際に重要なポイントになります。

つぎに、キャリア教育や臨床心理学のように最終的に実践に役立つということを視座に置く研究領域では、「操作可能な変数」を独立変数に選ぶことが大切になります。指導や支援といった操作（介入）によって変化させることができる変数という意味です。図1に示した社会的スキルは、スキルという行動レベルの変数であり、SSTという訓練技法によって高めることができます（つまり操作可能です）。このように、操作可能な変数を独立変数にすることで、実践につなげやすくなるわけです。

一方で、実践に役立てるという介入モデルではなく、そこにどんな現象が起こっているかを説明することを目的とする説明モデルの研究を行うのであれば、操作可能性はそこまで重視しなくても大丈夫です。この場合は「性格特性」などの比較的变化しづらい（つまり操作可能性が低い）変数を独立変数においても構わないということになります。このような説明モデルの研究も、現象理解に役立ちます。ですから、説明モデルの研究も決して「役に立たない」というわけではないことを付言しておきます。

今回は、従属変数の選び方について紹介します。

（十文字学園女子大学教育人文学部心理学科 永作稔）